



街を望んで（撮影…建築学科3年 荒谷 太一）

図書だより



第60号

平成30年3月9日

呉工業高等専門学校

図書館

<http://www.lib.kure-nct.ac.jp>

目次

・ 巻頭文 「図書館を元気にしましょう」	図書館長 笠井 聖二	2
・ 平成29年度校内読書感想文コンクールの表彰式		3
・ 第14回校内読書感想文コンクール		
最優秀賞		
「下町ロケット」を読んで — 夢を追う一人の男の物語 —	C1 国実 雅紀	4
「フラダン」を読んで — 大事なのは笑顔 —	C2 内藤 千晴	5
「突然、僕は殺人犯にされた」を読んで	C3 藤井 治樹	6
優秀賞		
1年生の部	E 原田 幹太 E 村上 一輝 C 徳永 航太 7
	A 松下 芽生 A 水沼 深雪	
2年生の部	M 尾崎 鈴香 E 市川 菜月 E 高松 陸 12
	C 西岡 美祐 A 河本 真拓 A 林 薫	
3年生の部	M 今田 淳 E 中本 さや香 C 岩本 みさ 18
	A 芳賀 由梨	
講評.....		22
・ 行事報告 平成29年度ブックハンティング	学生会 文化環境委員長 中井 康貴	24
	ブックハンティング図書紹介	
・ 図書館紹介 「学生と築いていく図書館」、貸出回数上位ベスト10.....	図書館	28
・ 編集後記		

巻頭文

図書館を元気にしましょう

図書館長 笠井 聖二

校内読書感想文コンクールは、学生の皆さんが「本を読むことを奨励・推進」する活動ですが、図書館では、読書推進のためにいろいろのことを実施しています。また、実現できずにアイデアで留まっているものもあります。そのうちのひとつとして「呉高专で読みたい60冊」というのがあります。1カ月に1冊として5年間で60冊、在学中に読んでもらいたい本を紹介するというものです。3年前の本校創立50周年にあわせて作成しようと思いましたが具体化できずに現在に至っています。このままだと実現できそうにありません。そこで、来年度のインキュベーションワークで、皆さんの力で実現してもらいたいと考えています。是非、参加・協力をお願いします。さて、頑張っって新しいことをすれば「図書館が元気になる」でしょうか。ここで、図書館に関する2つのことを紹介します。

○校内読書感想文コンクールにあわせて、ちょっと新しい試みをしたのに気がつきませんでしたか。夏休みに外部の読書感想文コンクールへの応募を、別途、募集しました。皆さんからの応募は1件だけでしたが、応募はゼロかもしれないと思っていたので、1件でも応募があり、安心するとともに、これからもっと色々と考えていこうという気持ちになりました。

○図書館は、学内の情報環境の整備や情報セキュリティ関係の仕事もしています（正確には、図書館が属する教育センター基盤部門が実施しています）。皆さんに協力してもらった今年度の情報セキュリティの学生アンケートでは、学内のWi-Fi環境の更なる改善を求める要望が多数ありました。関係するコメントのひとつに「Wi-Fiがとても遅い。話にならない○○」というのがありました。○○の部分には、書くのをはばかる語句が書いてありました。これを読んだとき、存在を否定されたような非常に暗い気持ちになりました。

どちらが「元気」になるでしょうか。新しいことを始めたら「元気になる」訳ではありません。元気だからこそ、新しいことを始められるのです。そして、そのような前向きな気持ちになるのは、日々のちょっとした出来事の結果だと思えます。「図書館を元気にする」とは、皆さんが良い形で図書館を積極的に利用してくれることです。利用したらいろいろな要望が生まれると思えますので、それを「元気になる」形で図書館に伝えてくれることです。そして、図書館が、皆さんが「元気になる」形で要望に応えることです。

図書館は、約1000人の学生・教職員が使う学校の施設ですので、当然、すべての個人的な要望に応えることはできませんが、皆さんに満足してもらえる「元気な図書館」になれると思えます。皆さん、一緒に「元気な図書館」にしていきましょう。

平成29年度 校内読書感想文コンクールの表彰式

平成29年度校内読書感想文コンクールの最優秀賞の表彰式が、12月20日（水）に校長室で行われました。最優秀受賞者は、以下のとおりです。

1年	環境都市工学科	国実 雅紀
2年	環境都市工学科	内藤 千晴
3年	環境都市工学科	藤井 治樹

受賞者には、賞状及び後援会からの副賞（図書カード）が授与されました。

校内読書感想文コンクールは、毎年図書館主催で実施しており、今年で14回目になります。学生は、

- 1年生：課題図書（芥川賞・直木賞受賞作等）
- 2年生：課題図書
- 3年生：ノンフィクションなど現代社会に関する本
- 4年生以上：自由

と、指定された本を読み、夏休み中に感想文をまとめて応募します。

今回は、自由応募である4年生以上の部には応募がありませんでしたが、次回はたくさんの応募があることを期待しています。



第14回 校内読書感想文コンクール最優秀賞

1年生の部

下町ロケット

池井戸 潤 著

環境都市工学科一年 国実 雅紀

「下町ロケット」を読んで

——夢を追う一人の男の物語——

私がこの本を手取るキッカケとなったのは友人の「この本は読みやすくおもしろいからおすすめ。」という一言でした。その時に簡単な内容を説明してもらい、そこで興味を引きつけられ、後日に本を手に取りました。

この話は、元宇宙科学開発機構研究員で現在は父から継いだ会社「佃製作所」の社長、佃航平が、資金繰り難、特許問題による提訴、それによる社会的信用の失墜などの大きな壁にぶち当たりながらも、一度は去ったロケット開発に情熱を燃やし、数々の仲間、意外な助っ人と共に数々の大きな困難をのりこえて夢を追いかけてひた走る、というストーリーです。

私がこの物語を読んでまず一番に感じたことは、心に残るセリフが多い、ということ。今回は、その中でも特に印象深く心に残った作中のセリフを紹介したいと思います。

一つ目は、佃製作所のメインバンクから出向で来ている殿村直弘の「私は会社が好きだし、社長やみんなと一緒に働きたいと思ってるんです。いまさら銀行からどう思われようと構いません。それが佃製作所のため

になるんなら、やらせてください。」という少々長めのセリフです。

このセリフは、提訴による社会的信用の失墜が原因で資金繰りに悩む佃に、殿村が銀行の預金解約という自らの首を絞めかねない策を提案し、殿村の心配をする佃に対して言われた一言です。私はこの殿村の一言に自らの地位を犠牲にしても大好きな会社やその社員を助けてあげたいという彼の強く固い決意が表れていると感じました。私は人のためになる事がしたいと思ってる今の学校へ進学しました。それだけ人の役に立ちたいという思いは強いものだと思っています。しかし、自分に何かしらのリスクが生じてしまう場合には、助けてあげたいという気持ちはあってもおそろくすぐ行動を起こすのは不可能だと思います。その分彼には強い勇気があると思うので、勇気のない私には見習いたい対象として強く心に残りました。二つ目は佃が言った「自分の都合のいいときだけすり寄ってくるような商売はやめてくれ。いいときも悪いときも、信じ合っていくのが本当のビジネスなんじゃないのか。」という一言です。

これは佃製作所が不利な状況で裁判を闘うことになった時に冷淡な態度で佃たちをあしらったメインバンク支店長が、佃側の事実上勝利が確定した後急に歩み寄ってきた時に放たれた一言です。

私はこの一言はビジネスに限らず、友人との関係でも全く同じことが言えると思います。日本でも時々耳にする「いじめ」を例にあげると、仲の良い友人が、多人数からのいじめを受けているから助けてほしいとたのんできたときです。ほぼ全員が口頭では、分かったと答えるはず。しかし、自分もいじめを受けるのではないかと考えてしまえば、結局見て見ぬふりをする人がほとんどを占める可能性が高いと思います。その中で一人だけでもその苦しみを一緒にうける可能性を覚悟の上で手をさし出してくれる人が居たら、それこそ本当の友達だと思います。しかし根本的な解決にはもっと別の策が必要になります。

この他にも、この作品には人の友情、信頼関係などに関する数多くの名言があります。

私はこの本を読んで、何があっても友人を裏切るような行いはせず、苦しそうな時は肩をかしてあげることが大切だと思いました。私もあと数年で社会人になります。今回得た教訓を大切にして階段をのぼりたいと思います。

フラダン

古内 一絵 著

環境都市工学科二年 内藤 千晴

「フラダン」を読んで

—— 大事なのは笑顔 ——

震災についてすっかり考えた事があるか。人の気持ちに少しでも気づこうとしていたか。仲間とは何だろうか。この本を読み終えた時、自分に問いかけた。そして自分がどんなに身勝手だったか知り、ショックを受けた。

本の舞台の被災から五年がたった福島には私が想像出来ない程、皆違う苦しみ、悲しみ、葛藤があった。正直私は、この本を読むまで震災のことを深く考えた事がなかった。しかし今は、復興と口で言うだけではなく、実際に何か行動しようと思った。例えば、高校生にも出来る募金やボランティアなどを積極的にするべきだと思う。また、震災だけでなく原爆や戦争についても考える必要があると思う。私は今年広島に原爆投下された八月六日に「全員が笑顔になる」をテーマとし平和公園でフラッシュモブをした。このような活動を一回でなく続けていこうと思った。

本の中の登場人物は、それぞれ心の中に辛い気持ちを持っていた。私自身も辛い過去がある。けど辛く悲しいのは私やあなただけではない。皆が苦しい気持ち、悲しい事を抱えて生きていくと気づいた。そう気づけば、前を向いて頑張れる気がする。

仲間とは信じ合える人たちの事ではないだろうか。こう考えた理由は、穰たち

フラ愛好会の全員がフラガールズ甲子園で詩織を信じ、心を一つにして踊っていたからだ。穰たちが詩織を信じたおかげで詩織は、甲子園のステージに立てられたんだと思う。また、ラストの大技の肩車が全員でキメルことが出来たのも仲間を信じ練習して来たからだと思う。仲間を信じる事は大変だが大事だと思った。

フラガールズ甲子園に、仮設での老人が見に来てくれた。その老人は以前、「フラなんか何になる」と詩織に言った。しかし踊り終わった詩織に酔芙蓉の花束を差し出した。なぜ来てくれたのかは分からなかったが、フラを通じ、老人の中で何か少し変わったのかなと思った。また、酔芙蓉という花は、朝開いた時には純白で、夕刻になると徐々に薄紅色になるらしい。私はこの花にも老人の何かが変わったという事が隠されているのではないかと思った。

本の中で心に残り忘れられない言葉がある。それは浜子の「あのなあ、人間、お互いになんか考えてつかかんねんだから、言葉つてもんがあんだよ。せつかく、おめーは意見があんのに、それをしっかり伝えられなくてどうすんだ！」という言葉だ。私はこれを読んだ時、共感というか「そうなんだ」と納得した。人の気持ちに気づこうとする事も大切だと思うが実際は、相手や自分の本音は言葉にしないと伝わらないのかと思った。私も部活でこれは後輩の私が言って良いのかと思う時があるが、その意見は自分のためではなく、チームを良くするためだから誰がとか関係ないと考えられるようになった。

私は、穰のようになりたい。理由は、穰が人に流されずに親切な心を持っているからだ。穰が水泳部だった時、他の同級生が後輩をビート板で叩いたりしている中、穰だけはそんな事をしなかった。また、友達でなくても困っている人を助けていた。これは本当にすごいことだと思う。大体の人は周りに流されたり、自分が思ったように行動できなかつたりするからだ。

私も穰のように自分をしっかり持って、私が考えて正しいと思った事を行おう。優しい心も忘れずに。そして自分を信じ、仲間を信じたい。詩織がよく言っていた「フラダンスで一番大事なのは笑顔よ、笑顔」は生活する時にも大切だと思った。やっぱり笑顔があれば元気になれると思う。私一人の笑顔が周りの皆に広がっていくかもしれない。

この本を読んで私は、たくさんの人を笑顔に、元気にさせたいと思った。これから私は、この本に学んだ多くのことを忘れずに生きて行こう。

3年生の部

突然、僕は殺人犯にされた

スマイリーキクチ 著

環境都市工学科3年 藤井 治樹

「突然、僕は殺人犯にされた」を読んで

私はこの本のタイトルに興味を惹かれました。それは殺人犯にされたという冤罪を訴える作品だと思い、一体どのようなことでそのような被害に遭うのだろう、それを教訓にできないものかと思ったからです。しかし、そうとは言うものの、日常とは少しかけ離れていないと、殺人犯になるような事はないのだろうと思っていました。しかしこの本は、そうした殺人犯になる可能性はこの日常にも存在するということを教えてくれました。

この本の内容は、スマイリーキクチという男性の芸人がコンビを組み芸人の道を歩みはじめます。ちょうどその頃、パソコンの一般への普及にともない、「2ちゃんねる」という匿名でコメントを投稿しあう、掲示板が提供されはじめます。するとその十年以上も前に大きく話題となった、一人の少女を集団で強姦、殺人を行った事件の犯人ではないかと、2ちゃんねるで取り上げられ、炎上。それ以降彼は、ネット上で殺人犯のように扱われはじめます。一度は収束したその炎上も5年後、元刑事を名乗る男が書いた著書がスマイリーキクチは殺人レイプ犯なのこのうのうと今や芸人として活動しているという趣旨の本が出版されてしまい、それが話題となり再び大炎上を引き起こしてしまいました。いわれのない罪を十年に渡り被り続け、幾度となく、ネットの匿名の悪者と戦い続けた一人の芸人の話と言ったところでしょうか。

この本を読んだ感想は、全く他人事じゃないな、と言うことでした。昔よりネット社会が進んだ現代、身元を特定することは困難ではないでしょう。またSNSで一つ調べれば、自分の名前のアカウントが見つかることでしょう。昔以上に発言に重み、責任があると思います。また何が理由か分からず、ネットで晒され、おもちゃにされてしまうかも分かりません。そのような重い事実を認識させられるよい機会になったと思います。最近の自分のネットでの行動を振り返ってみる

と、一つ自分にも心あたりがあるなと思いました。某人気オンラインゲームのプレイヤーの私ですが、そのゲームが近年の運営体制の粗悪さとその状態を放置したままオフラインイベントを強行し、ゲームにリソースを割かないことでプレイヤーの不満が大爆発し、炎上しました。そのとき、もちろん2ちゃんねるは荒れに荒れ、運営のブログには批判コメントが殺到しました。その時自分も、堪忍袋の緒が切れ、このゲームの改善案を強い口調でそのブログにコメントしました。すると、自分の打ったコメントから流れるようにブログに批判が殺到しました。このとき自分がもっとひどい口調でコメントしていたら、もっと大炎上していたのかなと思い、恐怖しました。私も匿名でのコメントは慎もうと感じました。

このように、一つの発言がトリガーとなり、人を一生苦しめてしまうかもしれないネット社会、無駄な発言で人生を破壊しないようにしないとと思いました。

優 秀 賞

1年生の部

火花

又吉 直樹 著

電気情報工学科一年 原田 幹太

「火花」を読んで

——お笑い芸人とは——

この「火花」という本は、無名のお笑い芸人スパークスの徳永という人が、営業で熱海の花火大会に行った時、先輩芸人あほんだらの神谷という人に出会うという話である。徳永はその神谷に憧れを抱き、二人は親交を深めていくという物語である。

この本の中で印象に残った場面が二つある。一つ目は、この本の冒頭部分の熱海の花火大会でのあほんだらの、ネタである。この場面のネタは、花火大会に向かう通行人が天国に行くか地獄に行くかを、叫ぶものだった。私はこのネタを読んだ時現代では見ることのできない、あまりにも奇抜なネタだと感じた。

二つ目はスパークスが出演していた漫才番組が一年で幕を閉じた場面だ。私はこの場面を読んで、芸人として世の中で成功して生き残っているのがどれほど大変なのかわかった。これは、今の芸能界でも同じだと思うが売れていない無名の芸人を合わせると、数えきれないくらいの芸人がいる中で、芸人として世の中に成功し生き残れる人は、ほんの一握りしかおらず芸人の世界は、すごく大変で難しいものだと感じた。

火花を読んだ全体の印象は、徳永と神谷の二人が、考え方が違うなが

らも売れるためにはどうすればいいか、や、芸人とはこういうものだ、などと話し合いながら、少しずつ、少しずつ成長していき世の中で成功し生き残ろうとする姿を感じることができた。

そもそも、世の中で成功するとはどういうことなのだろうか。例えば、芸人だと毎日テレビで見るとな人なのか。スポーツ選手だと、第一線で活躍し続ける人なのか。はたまた、大手会社の社長などで、儲けている人なのか。世の中で成功していると言えるような人はどんな人だと思いますか、という質問を投げかけるとおそらく多くの人がこのようなこと、人たちの答えにあげるだろう。しかし、本当にこのような人だけだろうか。「火花」の神谷のように、借金ばかり抱えている人でも、自分がやりたいと思った漫才で人を笑わせることができるのなら、世の中で成功したといえるかもしれない。このように、私が考える世の中で成功するというのは、大人になって社会に出た時、小さいことでもいいので目標を立て、その目標を達成したとき世の中で成功したといえるのではないかと考える。これは、大袈裟で小さいことかもしれないが、このような、小さい成功を積み重ねていくことが大きな成功につながると、私は思う。このように捉えることができれば、この世の中で成功したといえる人は、自分の周りにはたくさんいると思う。

実は私は、この本を読むのが今回で二度目だった。今回この本を読み、この本が芥川賞を取った理由、多くの人に読まれている理由がわかった気がする。こういった意味では、この「火花」という本は、とても普遍的な物語かもしれない。この本を読み、私と同じで、世の中で成功するとは何なのかを考える読者、はたまた、まったく違うことを考える読者。この本を読んで感じることは、人それぞれだと思う。

桜の森の満開の下

坂口 安吾 著

電気情報工学科一年 村上 一輝

「桜の森の満開の下」を読んで

——人としての感情のあり方——

私はこの作品を読んで「人とは一体何なのだろう。」という疑問を抱きました。この作品には山賊の男、都に住んでいた女が主に登場します。

山賊の男は度々街道に出てきて旅人を殺し身ぐるみ剥ぐなど残酷な存在として描かれています。しかし、この物語に登場するおもな人物の中で私たちの言う「人間らしい感情」の持ち主はおかしなことにこの男なのです。

山賊の男は欲望を持ち、何かを愛しそれに尽くすことを知るといふ普通な思想をきちんと持っています。対して都に住んでいた女は自分の夫を殺害し自分の全てを奪った男を恨むどころか素直に男に従い山を登る頃にはいいようにこき使い始めます。

物語の中ほどになると都の女は男に命じるような形で都の家に住み着物や宝石そしてあらゆることか人間の首を持ってこさせます。女がこの首で何をするのかというとまるで幼い子供が人形で遊ぶかのように「首遊び」をするのです。成長しきった美しい女性が人間の首で遊ぶその姿を思い浮かべるととてもこの世の光景とは思えません。

さて、では都の女が山賊の男にさらわれ生活していく中で狂ってしまったのかと言いますとそうではありません。そもそも女は狂ってなどないのです。考えてみてください、女は自分の家族を殺されても山に連れ去られても大きな感

情の変化がないのです。簡単に言えば驚くことはあっても関心はないのです。女の行動は一貫して己の欲望、しかも先に繋がらない欲望を満たすということになっています。これは人間というより動物のそれに近いでしょう。要するに都の女は最初から人間としてのしがらみを捨てたありのままの人物として描かれているのです。

この作品では序盤に桜が人の心を惑わすものとして描かれています。この桜は山賊の男が都に行くために通らなければならぬ道であり、人間味を残す男を正反対とも言える女にはりつけてしまう人の不安定さを表しているのかもしれない。

では、残酷ながらも人間味が十分にある山賊の男、人間味がほとんどないが生物としての愉しむという本能に満ちている都の女、一体どちらが人の在り方を示しているのでしょうか。

あえて人間らしいというよりは山賊の男でしょう、都の女も一人だけで存在するというのなら正しいでしょう。しかし、人間は集団で生きる以上何らかの制約があり、知性による制御が必要です。人間が集団で生きる生物である以上人間らしくあるために必要なものは愛情と己を包むことができる力でしょう。

この作品は山賊の破滅までの課程の中で、人の思考の不安定さ、一度行ってしまったことは取り返しがつかないこと、何かが見えてないまま歩んでしまった後には何も残らないという後悔を表しているのだと思います。

この作品を読んで「人とは一体何なのだろう」という疑問の僕の答えは感情と知性そして一人ではなく多人数で生き抜く考え方だと思えます。

蜜蜂と遠雷

恩田 陸 著

環境都市工学科一年 徳永 航太

「蜜蜂と遠雷」を読んで

——音楽を外へ——

僕がこの本を読もうと思ったきっかけは、書店に読む作品を探しに行ったときに、表紙に大きく「直木賞・本屋大賞史上初のダブル受賞」と書いてあったことで、とてもおもしろそうだなと思い、買って読んでみることにしました。

この作品は、国際ピアノコンクールをめぐる物語です。コンクールの審査員である三枝子は出場者のうちのある一人の少年に大変な嫌悪感を抱きます。

しかし、彼の演奏技術は非常に高く、他の審査員は彼を絶賛。結果、彼は次の審査に進む資格を手に入れることとなります。彼が進む次の審査には、アメリカの音楽大学で絶賛されている少年、過去に天才と称えられたものの母親の死によりピアノから離れてしまった少女、これが最後と決めこのコンクールにすべてを捧げるサラリーマンなど、個性豊かなコンテスタントが揃っていました。音楽家という厳しく辛い職業を目指す彼らの戦いや葛藤、そして辛い鍛錬の向こうにある音楽の楽しさ幸福を描いた、心が温かくなる作品です。

僕はこの作品を読んでみて、前向きな努力をもって、直向きにピアノに音楽に挑む人々の物語だと思いました。この物語は、コンクールの審査員やコンクールに出場するコンテスタントなど多くの異なる視点に移ろいながら進んでいきます。様々な視点が入り乱れ、非常に軽快に面白く読み進めることができました。

登場人物たちは皆、ハイレベルな国際コンクールに挑みます。目的は様々ですが、彼らは少なからぬ努力をし、音楽に真摯に向き合おう、これからも音楽と関

わっていきたいと思っている人々です。音楽家という狭く厳しい世界に足を踏み入れること、目指すことがどれだけ大変なことか僕は今まで考えたこともありませんでした。テレビに出ているような、成功している人しか知らないからです。楽な道はないからこそ、きつと多くの人が途中で諦めてしまう職業だと思っていました。でもそうではないのだとこの物語を読んで知ることができました。厳しい世界なのに、ほんの一握りの成功者になりたくて毎年毎年若者が挑戦するからコンクールはなくなるらないのだということに思い至りました。

彼らはもちろん、成功したいという思いはあると思います。しかし、たとえうまくいかなかったとしても音楽以外考えられない、どうしても諦められないという思いが強いのです。

この物語を読んで、わたし自身自分の生き方、あり方を改めて考える事ができました。やりたいこと、自分の夢、おっぴらにしていなくてもずっと心の奥底に眠っている夢がわたしにもあります。心のどこかで叶わない現実的でないと思っているから、あえて触れずチャレンジもせずに眠らせていた夢。

その夢を思い出し、叶えられるような行動を起こしたいと、今強く思っています。叶わないと思っていたから、無駄な努力はしたくないと常々思っていました。下手にチャレンジして失敗したらもうどうしようもないと、いつも夢を叶える努力を怠ってきたのです。

でも今、この作品を読んでこれほど諦められない捨てきれない夢ならそれに対する努力をとにかく全力でもきつと無駄にはならないと思えるようになりました。

夏の花

原 民喜 著

建築学科一年 松下 芽生

「夏の花」を読んで

——自分たちにできること——

私がこの本を手にとった理由は、単純に「夏の花」という題の響きが気に入ったからでした。自分の考える「夏」や「花」のイメージから明るい物語を連想していましたが予想とは裏腹に、原子爆弾投下の恐ろしさをつづつた物語でした。

原子爆弾投下時に実家のトイレにいた正三は一命を取り留めます。実家を出て広島をさまよっているとき、正三は数多くの「奇怪な顔」に限りなく出くわします。顔を血だらけにした女、「家が焼ける。家が焼ける。」と泣きわめく老女、「魂の抜けはてた顔」でうずくまる女などです。そして正三は、このことを書き残さなければならぬと心に呟き、焼けあとなどを見て、広島町の姿を書きしるしていきました。

この物語を読んで、特に印象に残っている場面は、「遂に来たるべきものが、来た」と自分を顧みるところです。ここでの正三は「さばさばした気持で」とあります。正三は、これだけの惨状を目のあたりにしても客観的に淡々としていたことが分かります。また、その後の文には、「今、ふと己が生きることと、その意味が、はっと私を弾いた」とあります。ここで彼はこの出来事を書きのことさなければならぬという使命感を感じたのだと思います。

それから、馬車にのって焼け跡を一覧する場面も心に残りました。「赤むけの膨れ上った屍体」の配置は、「精密巧緻な方法で表現された新地獄に違いなく」、硬

直した肢体は「二種の妖しいリズムを含んでいる」と書かれています。正三はこの辺の印象は「どうも片仮名で描きなぐる方が応わしい」とカタカナで一節を書きました。私はこのカタカナの文章を読んでみて、正三は無感情でなかったのではないかなと思いましたが、カタカナにすることでその場を表現することはもちろんのこと、自分の心の状態も表したかったのではないかなと思います。

物語を読み終えて、まず感じたのは自分の不甲斐なさでした。広島で生まれ育ったこともあり、小さい頃から原爆投下について触れる機会は多くありました。その度に原爆は恐ろしい、二度と同じことをしてはいけないと思いました。でも、いつも心の片隅で昔の出来事だと他人事として受け流している自分がいました。今考えると、その時の自分に腹立たしい気持ちになります。この本を読んで、被爆されて亡くなられた方々や今までお話を聞かせてくださった方々のことを考えると胸がズキズキと痛みます。

原子爆弾投下から七十二年を経てもなお、後遺症をわずらい、苦しみ続けている人がいます。私一人でできることはきつとわずかしかならぬと思います。今思いつくのは、この出来事を次世代へと伝えていくことです。一人の人ではできないことも、人数が増えればきつとできるようになるはず。だから、少しずつそういった活動に積極的に参加していけるような人になりたいです。

春の庭

柴崎 友香 著

建築学科一年 水沼 深雪

「春の庭」を読んで

—— 本から考える内側の穴 ——

今までに心を惹かれる建築物を見つけたことはありませんか？ 最近ではオペラハウスや東京スカイツリー、アンコールワットなどその国や都市を象徴する大きな建築も世界の各地に登場しています。そして、この本では「住宅街」という普段の何気ない日常を舞台としています。住宅街の中にある一つの水色の家に惹かれた女性「西」と、同じアパートに住む「太郎」の日々の一部を切り取った作品です。

この本の中で印象に残ったのは空き家だった水色の家に新しい住人が引っ越してきたことを知った西の心情で「空き家であるときは停止していた時間が、動いていた。・・・その場所の気配や色合いが一変していた。」のところ。自分の周りは住宅ばかりでよく空き家だった住居に新しい住人が来たり、住人が引っ越して空き家になったりする場面に出会います。西の言葉通り空き家を見ると表情がなく、穴の空いたような空間だと思ったり空き家に人が住み始めると空き家とは違う雰囲気、活気があると思ったりするので、この場面は特に共感できました。また「人形が人間になったような生々しさ」という表現は空き家では無くなった家をそっくりそのまま表した自分にとって心に残るものでした。空き家については太郎の目線でも似たような場面があり、「ビルやマンションの建設が続いているのに、内側には空洞がある。・・・中に隙間がたくさんできた大根を連想した。・・・」

スポンジや穴あきチーズなども思い浮かべてみたが、うまい喻えにはたどり着かなかった。」と言っています。自分が「埋まる」空き家や新しく建設される建物を喻えるとトカゲのしつぽだと思えます。古い家を取り壊した跡地に新しい建物が次々に建つ様子とかゲのしつぽが何度切れても復活する様子が重なる感じだからです。私が住む尾道も空き家が多いけれども、駅の近くにはマンションの建つ「隙間のできた大根」状態です。最近では空き家プロジェクトが始まり、内側を「埋めて」いく活動が起っています。自分がこの本の登場人物の言動からこのような活動を考える一つのきっかけになりました。

水色の家に住み始めた森尾さん家族と西がひよんなことから関わるシーンがあります。西は空き家だった頃の家と森尾さんが住んでいる今の家の表情の違いを感じます。改めて西の水色の家に対する思いの強さを感じることが出来ます。実は前に西が塀を乗り越えたり、太郎のベランダに入ったりして何とか水色の家を見ようとした場面があります。ここは西の行動が犯罪に近いので、西は周りが見えなくなりやすいタイプだろうと感じました。特に水色の家の風呂場が見たかつたらしく、お茶で服をぬらして洗いにいくと同時に風呂場を見ようとする計画も西らしいなと思いました。

最後のシーンは森尾さんが引っ越してまた空き家となった家に太郎が入り込むという謎なところです。初めの方は「人の家に入るのは止めた方がいい」と西に言っていた太郎も終わりの頃には自分も人の家に入るといふ西からの流されようが印象的でした。

この本は太郎や西の見る日常の風景が細かに表現されているし、登場人物も独特で印象に残りやすかったです。特に空き家の場面は自分の心情と重なるところもあり、深く心に残りました。建築と聞くと新しい建物をつくるイメージがあり、自分もその方中心に考えたりしていますが、空き家を見直すような古いものを活かすというイメージも持つことが出来ました。「新しいものだけでなく古いものを見つめる」頭の中を広く持つことを大切にしようと思いました。

ストロベリーライフ

荻原 浩 著

機械工学科二年 尾崎 鈴香

「ストロベリーライフ」を読んで

——大切なもの——

この本は、グラフィックデザイナーとしての夢、苺といういきものを育てている現実、養わなければならない家族等、主人公の恵介が様々なものを抱えながら、成長していく物語です。農業はかっこ悪いと思っていた恵介が、いつしかその自分自身の生き方こそかっこ悪いと思うようになっていく様子が、人間味あふれた表現で描かれていて、とても面白かったです。

私は中三の時、決断をしました。それは、高等専門学校に行くということです。中学の先生には、しっかり考えて決めるよう言われたのに、やりたいことが見つからず、人と違う経験をしてみたいといった興味だけでこの選択をしてしまいました。高専生活は楽しくて、充実しています。でも、高専に来たということは、専門について学ぶということであり、進む道が限られてくると思うと、いろいろやりたいことが浮かんできました。普通科に行けば、これから、もつといるんな選択肢について考えることができたと思います。本当にこの道を選んで正しかったのかと、漠然とした不安と後悔を抱えていました。そんなとき私はこの本に出会い、その不安がなくなりました。それはこの本を通して、次のようなことを思ったからです。

恵介は、11年広告代理店に勤め、その後独立してグラフィックデザイナーとし

て働いてきました。その時間は、決して短いものではないと思います。もともと農家を継ぐという事に消極的だった恵介が、苺農家を始めるのはきつと勇氣がいることだったはずですが、しかし、いつしか恵介は、農業について知っていくうちに、のめりこむようになっていきます。そのうちに恵介が、自分は何のために生きるのかを見だし、人として成長していく姿を見て、人はどの道を進むか、ではなくどう進んでいくか、が大切なのだと思いました。

お父さんの急な病氣により、いやいや苺農家を始めることになった恵介は、害虫、病氣等の難題を抱え、大変で報酬も少ないこの仕事に音を上げていました。しかし、苺狩りで笑顔になる子供たちを見て、楽しいという気持ちを抱くようになりました。それからというもの、苺狩り、直接販売をするというアイデアを思いつき、ネット配信を通じてそれらを成功させていきます。やはり、どんな仕事をしていても、楽しむということは、意欲的になることができるということであり、とても大切なのだと思いました。また、ネット配信で成功したのは、これまでのデザイナーとしての経験があつてこそで、人生においてどんな経験も、きつと大切なものなのだと思います。

このように様々な、大切なものについて考えると、きつと私の高専生活は、今しかできない貴重な経験になるし、人生はまだまだいろんな道を選ぶことができるのかなと思いい、すぐく希望が持てました。また、どんな選択をしたとしても、大切なものを見失わずに、成長を忘れず進んでいけたらいいなと思いました。

私がこの本の中で、印象に残ったところがあります。「自分にはこの仕事しかない、と思いつめると人は苦しくなる」というところです。この言葉には無限の可能性を感じました。自分の限界を自分で決めてはいけない、柔軟に考え、いろんなことをつなぎ合わせて考えることも大切だ、というようなことが言いたかったのだと思いました。また、「命綱は一本より二本」とも書かれていました。本当にその通りだと思えます。できることや経験、知識は、多すぎて後悔することはないはずですが、これから、特に学生のうちに、もつといるんなことに挑戦し、いろんなことを学んでいきたいと思いました。これからの学生生活を今までより有意義に過ごせそうです。

博士の愛した数式

小川 洋子 著

電気情報工学科二年 市川 菜月

「博士の愛した数式」を読んで

——永遠の真実とは何か——

私がこの本を読もうとしたきっかけは、私が「本を読むことが苦手」ということと、「数学が好き」ということからだった。本を読むことが嫌いではないしむしろ好きなのだが、内容が濃いものになるとやはり表現が難しくなってくるので、私は軽い内容の本しか読めない。また私は極端な理数系なので、文学的な考え方があまり分からない。最初に言ったように私は数学が好きだ。なぜならば数学はさまざまな求め方があるが、答えがはつきりと決まっているからだ。一つの話でもたくさんさんの解釈がある文学とは違い、数学は一つの答えをさまざまな方法で導き出す。よって私は文学と数学は相容れないものたちだと思っていたのだが、この作品を読んでがらっと考え方が変わった。

この作品は、記憶が八十分しかもたない数学の博士の元に家政婦としてやとわられた主人公とその息子が数学やさまざまな出来事を通して博士と打ちとけていくというあらすじになっている。博士は日常的な記憶は八十分しかもたないため、いつもメモをとったふせんを服にたくさん貼り付けている。博士は事故にあっただけで記憶障害になったが、それ以前の記憶はあるため、数学だけは忘れなかった。なので博士は口を開けば数学のことしか言わないため、変人扱いされ、家政婦もしょっちゅう変わっていた。そんな博士の家政婦となった主人公の息子は博士から「ルート」と呼ばれている小学生だった。

私がおもしろいと思ったのは、この主人公と息子に数学を語るときの博士の言い方だった。博士は会話のちよつとした部分でも数学を織りまぜてくるのだが、例えば、真実とは何かと主人公との会話ででてきたときには、博士は直線を例に出した。主人公に紙に直線を書かせた博士は、主人公が書いた直線に対して言った。「それは正確には直線ではなく線分である。本物の直線は幅がなく端がない。現実の紙に本物の直線を描くことは不可能だ。では真実の直線はどこにあるか。それはここにしかない。」そう言っただけで博士は胸に手を当てた。私はこのシーンを読んで衝撃を受けた。私が認識していた数学はすべてにおいてちゃんとした目に見える答えがあると思っていたが、考えてみれば虚数や直線は、ちゃんとした定義で考えると私達が普段使っているものは本物ではないということになる。「永遠の真実は目に見えない。」と博士が文中で言った通り、私達は本物ではないと分かりながらも直線を書き、虚数を使えるのは、自分たちの目には見えなくても頭の中では真実を知っているからだ。私はそのことに気づかされて感動した。数学にも文学的などころがあり、それをこの作品では丁寧に表現されている。

博士は数学を淡々と語るのではなく、物語を語るかのように丁寧に説明した。たとえ八十分ごとに初対面になる主人公にもルートにも。この作品を読んで思ったことは、視野をもっと広くもち、時に考え方を変えてみるのが大切だ、ということだ。数学と文学は相容れないと決めつけてはいけない。数学の答えはすべて正しいと決めつけてはいけない。常に目に見えない真実を考えなければいけないと私は思った。

フラダン

古内 一絵 著

電気情報工学科二年 高松 陸

「フラダン」を読んで

——フラの先にあるものとは——

二十四時間テレビで障害者と芸能人が協力して様々なことを行い感動を誘っていた。しかし、その内容に某番組に出演している障害者が「我々が番組に利用されている」と批判していた。世間一般から見ても称賛されていることを行うのは大切。だが、相手に活動者側の思いが伝わっているとは限らない。

私はIWで社会貢献型のものに参加しているため主人公達の活動に深く共感したことがこの本を選んだ理由だ。

「フラはハワイの文字ともいえる貴重な文化。君が思っているフラは伝統的なフラとはほど遠い。」宙彦の正論は十分な説得力を生む。自分の価値観だけで物事を考えてはならない。大きな視野で見渡すことで新しい発見があり、自分にとって価値のあることをより得られるのだと思った。

フラ愛好会は五年間に百五十カ所以上で慰問を行い、踊る女子達はきらきら輝いて見え魅了された。悔しいけどかっこいいかも。何かに全力で取り組むことで周りを愛えられると改めて気づかされた。この先、無駄だと思ふことがあっても諦めず頑張って何かを変えたいと強く思った。

ステップを覚えただけではオテアは完成しない。現在のハワイでは本来の文化を取り戻す動きや古典フラ、カヒコの復興が主流。形だけを完璧にしても相手に

何かを伝えられる訳ではない。福島復興のためにに行っているフラダンス。形の先にある自分達の思いの方が大切だと感じた。

ついに初めて参加する慰問の日が来た。ラストの大技で大失敗。一瞬の沈黙の後、割れんばかりの拍手がいつまでも鳴り響いた。小学校の発表会で最後に失敗して落ち込んだが、観客から拍手をもらってそのミスを忘れる程、嬉しかったことを思い出した。

隣町の仮設住宅がある公園でスポンサーが後援するサマーフェスティバルが催されたが、住人達はフラなんて見たくなかった。努力が報われず辛くなることは今後何度も起こると思う。だが、この状況を打破しなければ何も前に進まない。そのために必要なものを見つけられるようになりたい。

練習に来なくなった部長からフラガールズ甲子園不参加の申し出があった。それでも全員で出場したい部員達の出した答えは……。

失ってはじめて大切な存在に気づけたからこそ彼女にもう一度戻ってきてほしくて行動する彼らの姿がかっこよく憧れた。

フラガールズ甲子園当日。全国二十五校が集結。優勝を目指し練習してきたが今、踊っているのは部長を取り戻す為、全身で訴える。

部活等で結果が全てという人がいるが私は、優勝といったものは単なる飾りではなく仲間と汗を流し辛いことを乗り越えて皆で集大成を迎えた先に我々にとって大切な何かがあるのではないかと思う。

ある日突然の震災によって街を失い、家族を失った方々にとって先の見えない不安が本当に歯がゆく苦しかったと思う。サマーフェスティバルでフラなんか見たくないといいていた仮設住宅の老人が花束を手渡す姿が一番印象に残った。私は様々な衝突・苦悩の中で部長の誠実さ、宙彦のポジティブさ、穰や部員全員の優しさが一つになったから彼らの踊りはほんの少し何かを動かしたと思った。

私自身、部活でなかなか上達せず試合でもミスをしてコーチや監督に怒られくじけそうになった時にチームメイトが声をかけてくれてまた頑張ろうと思えた。だから私も行動することで周りの人の心を動かせるようになりたいと思った。

これからの社会を担う私達にとって先人からの教訓を大切にすることが必要だと思っていた。しかし、この本を読んでそれだけでなく気持ちの方が分かりあえることが単純なことのようにとても重要なことだと深く考えさせられた。

女生徒

太宰 治 著

環境都市工学科二年 西岡 美祐

「女生徒」を読んで

——小さな幸せ大きな幸福——

「幸福は一夜おくれて来る。」

これは、最も印象に残った場面だ。誰もが生きていく中で、良い出来事も悪い出来事にも出会う。その中で悪い出来事しか起きず嫌になり、投げ出してしまいたいこともあるだろう。しかし、普段は気づかない幸福も振り返ってみると幸せな事だったり、何かを失って初めて気づく幸せもある。諦める前に我に返ってみることも大切だと思う。そんな事を改めて教えてくれたこの言葉に強く惹かれた。

ある一人の女生徒。そんな少女の視点から描かれたこの作品の中には、「眼鏡は、お化け。」

という、言葉がある。眼鏡をかけていなければ、相手の顔ははっきりとは見ええない。その為、相手の顔が優しく見え喧嘩をしたいとは思わない。眼鏡をかけてしまえば、ロマンチックさや、美しさが無くなってしまう。だから眼鏡はいや。彼女の考えに共感できた。私も眼鏡をかける時がある。眼鏡をかければ、周りの風景や人がはつきりと見えるようになる。そうすれば人の顔の表情が鮮明に見えるため、相手の様子を伺って思ったことを言えない時が多々ある。争い事を避けたいからだ。高校生である私は、人間関係で悩んだりある一言で不仲になってしまったり、喧嘩になり落ち込んでしまうこともあると思う。そういった情景は視覚から入ってくるが、眼鏡をかけていなければそのような情景は見ることはできな

い。人の顔を伺わなくて良いのだ。そういった面から彼女の考えに共感できた。しかし、眼鏡をかけることは欠点だけではないとも思う。現代では携帯電話が一般化され、物事を伝える手段としてSNSが増え続けている。しかし、本当に大切なことは直接伝えるべきだと思う。伝える事は誤解を招かない事にも繋がる。同じ言葉でも捉え方の違いによって衝突を招いてしまうこともある。言葉足らずな私もその一人だ。一所懸命伝えようとしている人を怒る人などいない。今まで気づかなかった相手の気持ちが分かってくる。自分の気持ちも伝わる。なので時には勇気を出して直接伝えることも必要だと思う。そのため眼鏡は相手の気持ちや表情を読みとるために大切だと思う。そういった点から眼鏡は様々な角度からみて、お化けなのだと思うた。

他にも、

「大人になりきるまでの、この長い厭な期間を、どうして暮らしていったらいいのだろう。」

という言葉にも共感できた。時には他人が羨ましいとか、劣等感を感じて自分を非難してしまうことがあるだろう。途中でつまづいて自分を見失ってしまうことも。大人になりきれないどうして良いか分からない思春期の悩みをここでは伝えたかったと思う。そういった点で印象に残った。

人生には正解などないのだと私は思う。だからこそ、生きたいように生きたらいいのではないか。時には挫折して悩んでしまうこともあるだろう。それもまた人生である。

現代を生きる思春期の私達も、主人公の女生徒にも言える言葉ではないだろうか。色々な経験を経て大人になり、ふと、人生を振り返ってみた時、苦しい経験もいつか笑って過ごせるようなそんな人生を送ってみたい。そのために勉強や部活などを頑張り、今を一生懸命に生きたいと思う。そうすれば、いつか自分は幸せ者だと思えるだろう。

「幸福は一夜おくれて来る。」

正しくこの言葉通りだと思った。

博士の愛した数式

小川 洋子 著

建築学科二年 河本 真拓

「博士の愛した数式」を読んで

——共に過(こ)す時——

「八〇分」……。長いようで短い絶妙な時間だ。時というのは心の状態で感じ方が違う。日常生活でもよく感じるのだが、急いでいたり、もっと遊びたいと思っていると、時間はあっという間に過ぎていき、楽しみで待ち遠しかったり、退屈だと思っていると、時間はゆっくりとしか進んでいない気がする。いつもこのような体験をしては不思議だなと思う。「博士」の記憶には、八〇分というLimitがある。過去八〇分より前の記憶は新しくはならない。数十年前の記憶と八〇分以内の記憶があるのみなのである。この八〇分は「博士」にとってどのくらいの時間で、どのように感じているのだろうかと思った。

「私」が「博士」の家で家政婦として働き始めて間もないころ、「博士」は「私」には考えているか、考えていたのを邪魔されて怒っているかどちらかの表情しか見せず、「私」は、付き合いつらさを感じていた。元、数学の研究者だった「博士」。数字(特に素数)を愛する博士に対して、数字どころか算数すら好んでいない「私」は「博士」の数字に関する話題になかなかついていけなかった。しかし、「私」の息子である「 λ 」(ルート)の登場で、「私」の「博士」に対する考えは変わっていった。出会った日から「 λ 」を溺愛し、可愛がる様子を見て「私」は「博士」を信用するようになった。このシーンを読んで私は、親が子を大切に思う気持ちというのはいくらにも厚く・温かく・優しいのだと思ひ知らされた気がした。

一方で、「私」は「博士」の数字に関する教えるを聞いているうちに、素数の何か

果てしないものに引き付けられていった。「 λ 」もまた、数字の世界に魅了されていく。数字と三人の深く、どこか重みのあるこの話に、「阪神タイガース」という共有できる楽しみが加わり、話の雰囲気は軽くしたように感じた。こうして一生「私」や「 λ 」を覚えることのない「博士」と過(こ)した日々は去っていき、いつの日か「博士」は亡くなってしまった。が、「私」や「 λ 」の中には「博士」との思い出が絶えることは二度となかった。

この話で、私の印象に残ったことは、「私」の「博士」に対する心情の変化である。

初めは、家政婦の仕事の主人としての「博士」に迷惑をかけないように決められた仕事をやるだけであつたが、「博士」に数字について様々なことを教えてもらうことだんだんと数字に興味がわいていった。また、「 λ 」をやさしく抱擁している様子を見て、「私」は「博士」を信用して自分から数字について質問するようにささなっていた。「私」が「博士」を信用していることを象徴するのが、博士の家で雷が鳴った際に、「私」は「彼の背広の袖口を握りしめた。」というところだと思う。「博士」と数字について語り合い、教えてもらいを繰り返して培われた「博士」を心から尊敬し、慕(こ)う気持ちが、「博士」に頼るといふ行動を生み出したのではないかと思う。

数字は、言葉のように感情を直接伝えることはできない。が、数字を通して「私」と「博士」が共有した時間というのは、数字でも言葉でも表現できない信頼関係を生み出すことができるのだと知り、感動した。

この本を読んで私は、互いの信頼関係というのは、言葉のみで築くものではなくて、同じ場所で時間・気持ちを共有することによって最も育まれるものなのだと知ることができた。

人との一瞬一秒の関わりを大切にしていきたい。

沈黙

遠藤 周作 著

建築学科二年 林 薫

「沈黙」を読んで

——信仰と死を天秤にかけて——

「形だけ踏めばよいことだ」
 作中、棄教を勧める役人が切支丹である人間たちに、幾度となく語りかける一言だ。

切支丹迫害。小学生の頃から日本史の授業で何度か学習した単語である。実際に私は、家族旅行で長崎を訪れ資料館を見学したりもした。

踏絵やマリア観音を見る度に、私はなぜ彼らがそんなに基督教という宗教に執着するのが理解できなかった。踏めば生き延び、踏まなければ拷問の末に殺される。もし私が彼らと同じ立場であれば、迷い無く踏んでいたと思う。それは、イエス・キリストよりも自分の命のほうが大切だと考えるからだ。

この物語の主人公である司祭のロドリゴは自分が棄教するなど有り得ない事だと考えていた。拷問されたにも関わらず、棄教もせずに自分の目の前で死んでいた日本人たちの事を考えていたのかもしれない。自分が司祭として生き、彼らのように迫害されながらも頑なに基督教を信じ続ける人間を救わなければならぬと、彼は決意していた筈だった。

だが、彼は最後に踏絵を踏んだ。それは、自らが何度苦しむ人々をお救い下さいと祈っても、神が黙ったままだったからだ。

ロドリゴが踏絵を踏んだ時、神は初めて彼に『踏むがいい。お前の足の痛さを

この私が一番よく知っている』と語りかけた。それは、彼が一時は裏切られたと感じた神の存在を、自分の中にはつきりと感じた瞬間だった。

その後、ロドリゴは聖職者の汚点のようにみなされていたが、彼の心の中は落ち着いていた。なぜなら、自分の心を裁くのは聖職者たちではないと分かっていたからだ。

私は、この本を読んで「宗教」というものを改めて考えた。

世界中には幾つもの宗教がある。それらは本来、上下などなく、人生に悩み、苦しむ人々を救うためのものであった筈だ。だが、世界を見てみると、宗教による対立によって幾つもの国や地域が戦争し、毎日幾人もの血が流れている。

信じるものはそれぞれの心の中にあり、苦悩の中で祈りを捧げるものは、仏や神などそれぞれ違うはずだ。

恐らく、一人の人間が何かに縋りながら生きていく為には、自らの信じるものだけが正しいと考える事が一番安全なのだろう。だが、一度広い目で周りを見渡すことも大事なのではないだろうか。

それは宗教だけでなく個人の思考であつても同じである。自らが正しいと信じる正義や信念を貫くのも良い。だが、一度周りを見てみるのも大切である。自らが信じているものが、世間一般で信じられているものが、自分の中で当たり前のこととなっている考え方がすべて正しいとは誰にも言い切れないのだから。踏絵を踏むのは神を否定することになるのだと悩み、信仰と自らの命を天秤にかけ、そして基督教を信じ続けて死んでいった、あの日本人達のように。

長崎にある「沈黙の碑」をご存知だろうか。そこには、遠藤周作の著した文章が残されている。

『人間がこんなにも哀しいのに 主よ 海があまりにも碧いのです』

人間がこんなにも苦しみ、悩んでいるにも関わらず、海は変わらず美しい。雄大な自然を目の前にして、人間など小さなものだと語っている。

戦争や紛争が常に起こり、不安定な世界情勢だからこそ、一人ひとりがはつきりとした自分の意思や意見を持つべきである。そして、それであつてお互いが理解しあえるような世の中が訪れることを切に願う。

3年生の部

理系の子
高校生科学オリンピックの青春

ジュディ・ダットン 著

機械工学科3年 今田 淳

「理系の子 高校生科学オリンピック」を読んで

私がこの本を選んだのは、「理系の子 高校生科学オリンピック」という題名に惹かれたからだ。高専生である私は、ずばり理系である。そして、男だらけのこの学校に通う毎日の中で、「青春とは何か」というのは永遠のテーマでもある。今回、その答えに近づく手がかりが得られるのではないかと思いこの本を読むことにした。読んだ結果、その答えはまだまだ遠いままだったが、私は別の大切なことを学ぶことができた。

この本は、「インテル国際科学フェア」という、世界の高校生たちが自分たちの研究を競うコンテストで、そこに出場する内の十数人の姿を描いたものだ。私がまず初めに感じたのは、彼らへの尊敬の念である。高校生にして世界で勝負していた彼らは、人並み外れた才能を持ち努力をしていた。

そして、そんな彼らを知り私が学んだことは、「逆境が力になる」ということだ。彼らの中の一人、ギャレットという少年は、太陽光を利用したヒーターを、廃車や空き缶などのガラクタから作り上げた。彼の育った環境はとても貧しく、冬になると暖房の無い家は厳しい寒さに襲われる。喘息に苦しむ妹のために、これは発明されたのだ。

また、BBという少女はハンセン病の研究で科学フェアに出場したが、実は彼女自身がハンセン病患者だった。BBはハンセン病にかかり、一度絶望の淵に立たされるが、同時に、自分や周りの人間がこの病気に対して持っていた誤解や偏見に気が付く。そして、自分が病気にかかったことには理由があるのだと考え、これらを払拭するために科学フェアへの出場を目指す。

私は、逆境に立ったとき、そのことに意味を見出し立ち向かう彼女の姿に感銘を受けた。そして彼らから、逆境の中だからこそ得られるものはきっとあるのだと思った。私は、こんな考え方と勇気があれば、これからもっと強く生きていけるだろうと思った。

ところで、私はこの本を読みながら彼らと自分を重ね合わせていた。私も、あるコンテストに出場しよう

と、今準備を進めている。「全国高専英語プレゼンコンテスト」だ。三人一組で出場する。彼らと比べるとスケールは大分違うが、私たちにとっては大きなコンテストだ。彼らはコンテストを勝ち抜くため、コツコツと実験を重ね、失敗を乗り越えていた。同じように、私たちも練習を積み重ねなければいけない。本番が近づくと、日に増すプレッシャーにも耐えなければいけない。公衆トイレの細菌について研究したセイラとシュワンのチームのように、チームの仲が少し陰悪な雰囲気になることもたまにある。でも私は、この本を読んで思った。このコンテストはきっと私達を成長させてくれるはずである。入賞できるかどうかはわからないが、達成感を味わったり、今までの自分より大きく変わったり、新しいことをする勇気になったりするかもしれない。コンテストが終わる頃には、セイラたちのようにチームメイトが唯一無二の友人になっているかもしれない。

この本は、私がこれからする挑戦の力になった。全力で挑戦したいと思う。

〈刑務所〉で盲導犬を育てる

大塚 敦子 著

電気情報工学科3年 中本 さや香

「〈刑務所〉で盲導犬を育てる」を読んで

まず、私がこの本を選んだのには二つの理由がある。一つ目は、私自身が盲導犬などの訓練士という職業にあこがれを持っていたため、盲導犬に興味があったからである。二つ目に、「刑務所」で盲導犬を、という状況に目がひかれたからである。悪い事をした人たちが盲導犬を育てるということは一体どういうことなのだろう、本当にそのようなことが閉鎖的な場所で行えるのだろうか、といった疑問を持ちながら読み始めた。

社会から遠ざかった所にある刑務所で、社会で活躍する犬を育てられるのか、という疑問はすぐに解けた。それを逆手に取ったような、うまくできた制度だった。実際、「育てる」と言えど、本格的な訓練が始まる前の一年ほど、犬たちに愛情を与え続ける役目である「パピーウォーカー」をするのだが、平日は訓練生（受刑者）が世話をし、週末は一般の家庭（ウィークエンド・パピーウォーカー）が世話をするというしくみである。刑務所では犬に見させることができない外の世界を、ウィークエンド・パピーウォーカーが連れまわしてくれるのだ。一般的にパピーウォーカーは日中家にいて、月一回ほどのレクチャーに参加できる、などの常勤の人に厳しい条件がつく。共働きが多い近年、土日だけなら受け入れることのできる家庭にもできる、といったアイデアはとても良いと考えた。そのような制度がどんどん広がればもっと盲導犬などが増える一因となれるのではと思う。

この本には日本初であったこの試みの一年目が記録されていた。日本より自由度の高いアメリカの刑務所でさえも批判や厳しい現実がある。「刑務所」のルールや、他の受刑者や刑務官からの厳しい目や「ゆるそう。」などの声の中でもこのパピープログラムは一年目ながら成功したことが読みとれた。それは、犬に本当に愛情をそそいで育てる訓練生と、彼らのやる気を維持し続けたプログラムを担当した方々の結果だと思う。途中で他のプログラムに代える人がいたり、犬たちの様々な問題に悩まされたりしたが、やりがいを感じ、

心境・表情・性格が変わる訓練生たちの様子が書かれていて、犬が与える良い影響はすごいのだろうと思う。自己肯定感が小さかった彼らが、愛情を裏切らない無垢な犬に触れて、慈しみをおぼえ、責任感、社会貢献の実感で更正するこのプログラムは、彼らの社会復帰への大きな出来事だったはずだ。後日談ではそれぞれが良い顔でうまく復帰できている姿があった。

犯罪を犯した人々が社会復帰することはとても大変だと思う。パピープログラムを修了したからといって前科は消えない。でも、社会貢献もできて命の重さ、自分のできる事に気付くことのできるこのプログラムと、更生をさせる犬たちの偉大さは世に広まるべきだ。

おっちゃん、なんで外で寝なあかんの？

生田 武志 著

環境都市工学科3年 岩本 みさ

「おっちゃん、なんで外で寝なあかんの？」
を読んで

ホームレスの人はなんか怖い。ホームレスには仕事をしなかったらなるのだ。これは私が持っていたホームレスの人たちの印象である。しかし、この本を読んで野宿をしている人がどのように生活しているのかということや、野宿を始めた原因を知ることで、ホームレスの人たちへの印象が変わった。

まず、ホームレスの人はなんか怖いという印象だが、それは私の勝手な思い込みではないかと思った。この本では著者が、大阪の釜ヶ崎で子どもたちとホームレスの人たちを夜に訪ねて、体の具合を聞いたり、おにぎりとお味噌汁を渡したり、お話ししたりする活動のことが書かれている。その活動の話で、私は実際に話したことはないけれど、ホームレスの人たちは本当は怖い人ではなく、とても親切で優しい人なのではないかと思った。

私は高専に入ってから広島で暮らすようになった。そこで初めて身近にホームレスの人を見た。その人はバスの停留所に段ボールや布団を置いて寝転んでいた。私はその前を自転車で通り過ぎたが、なぜか怖く、目を合わせないようにしようと思っていた。きっと私のように考える人はたくさんいるのだと思う。そしてそれはホームレスの人にとってとても辛いことなのだと思った。ホームレスの人は本当はとても優しく、真面目な人が多いのだ。ホームレスになる原因には、日雇いなどの仕事をしていて仕事なくなったことや、会社の倒産、クビ、年をとって雇ってもらえなくなったこと、そして仕事なくなったわけではないが、家族からの暴力やトラブルで家を出たことがある。そしてその人たちは一生懸命に生きてきたのだ。何も怠けていたわけではない。それなのに怖いという印象を持たれ、人に避けられる。確かにお金がなくて、きれいな格好はできていない。しかしそれだけで人を判断するのはよくないことだと思った。私がホームレスの人の立場だったらとても辛いと思う。誰からも話しかけてもらえず、避けられるのだ。しかし

そんなとき、もし誰かが声をかけてくれたら、それはとても嬉しいことではないかと思った。著者の活動はすごいと思った。人を励ましていると思った。そして、炊き出しや夜回りといったホームレスの人たちを直接支援する活動に参加して、実際にホームレスの人と話してみたいと思った。人を見た目で判断せず、中身を知り人を理解する人になりたいと思った。

次にホームレスには仕事をしなかったらなるという考えだが、前にも書いた通り真面目に働き、仕事を失った人がホームレスになっているのだ。ホームレスの人はアルミ缶や段ボールを集めて、それを廃品回収の会社に売るリサイクルの仕事で生活を営んでいる。それは簡単なことではない。八時間や十時間かけてアルミ缶を千個集めて、やっと千円となる。七十六歳のおじいさんは著者に生活保護を勧められても「わたしはアルミ缶を集めて自力で生きていきます。まだ人さまの世話にはなりたくありません」と言う。なんて真面目な人なんだと思った。ホームレスの人は仕事をしていない怠け者の人ではなく、仕事がなく、でも自分にできることを精一杯している働き者の人だとこの本を読んで思う。そして、ホームレスは誰でもなりうるのだと思った。また、ホームレスから抜け出すことはとても難しいのではないかと思った。アルミ缶集めではその日の生活を送るだけで精一杯だ。普通の生活に戻れるような支援やそんな生活にならないような社会の制度が必要だと思った。

ホームレスの人を自分とは関係のない人と思わず、お互いを支えあえるような社会になるといいと思った。

ネグレクト

杉山 春 著

建築学科3年 芳賀 由梨

「ネグレクト」を読んで

今年の初夏に、私に初めてのいところできた。知らせを聞いてから二ヶ月、ようやく彼女を抱き上げたときにこみ上げた喜びと困惑と畏怖が混じり合ったなんともいえない感情をうまく説明できないが、そのときの私の腕の中にあつた温度と質量は、まさに生命力の塊で、爆発しそうなほどにみなぎっていた。

十六年前、彼女とほぼ変わらない重さの幼女が亡くなった。真奈ちゃん、三歳。本当なら周囲にその愛らしさを振りまき、周囲からの愛に包まれている頃、両親から食事を与えられず、おむつも替えてもらえず、自宅の部屋に置かれた段ボールの中、ミイラのような状態で餓死していた。両親はともに十代で親となった茶髪の夫婦。事件の概要だけ知ったとき、私は特に母・雅美に対して強い憤りを覚えたが、読み進めるうちに世の中の女性はどのようにして「母親」になっていくのか、なぜ雅美は「母親」になれなかったのかという疑問が生まれた。

私の一番身近な「母親」である私の母は、第一子の私を出産するまでは、子育てに興味がなかったという。出産のため仕事に穴を開けることを心配し、育児で自分の時間がなくなれることを不満に感じる、世間が思う母性とはかけ離れた女性だったようだ。それでも十八年間休まず母親業を続けてくれている。「子育ては大変で、つらいことも多いけど、赤ちゃんの由梨を育てているとき、父さんや周りのみんなが由梨だけでなく私のことも大切にしてくれたから何とか頑張れたんだと思うよ。それに、そんなに難しいことはしてないよ。おばあちゃんにしてもらったことをそのまま由梨にしてくれただけだと思う。」という母の言葉は、私の疑問を解消する答えそのものとなった。

雅美は真奈ちゃんにミルクをあげるとき、抱っこせず、哺乳瓶を立てかけてくわえさせていた。そしてそれは、雅美の母が幼い雅美にしていたやり方だという。子育てを知らない私でさえ、ミルクは抱っこして飲ませるものだと簡単に思いつくし、ネットで調べればいくらでも育児についての良策が得られる世の中なのに、

それでも無意識のうちに母親のやり方を踏襲していることに驚いた。

適切ではなかったとはいえ、雅美は確かに育児をしていたのに、そこから育児放棄へどう繋がっていったのだろうか。育児に関心のない夫、自分の育児のやり方を否定する義母、弱い心を過剰な買い物で満たした果ての借金。さらに娘の発育の遅れを認めたくない気持ちから自らを社会から切り離してしまった。雅美の生育歴から、母との関係がうまく築けなかったことも原因とされている。もし自分が雅美なら「どうして誰も私を支えてくれないの。」と叫びたくなると思う。自分の心が安定していないのに、子どもを大切になんてとてもできないだろう。著者は、雅美には母でも義母でもない第三者からの支援が必要だったと考えているが、この事件では保健師や医師などのプロですら死を防ぐ力にはなれなかった。第二の悲劇を生まないためにも、社会全体が育児放棄のプロセスを理解し、支援が必要な母親を安心して育児に取り組める環境に導く仕組みがあることをプロだけでなく全ての大人に知ってほしいと強く感じた。

私はいつの日か我が子をこの手に抱きたいと願っている。実際そのときが来たら、私はどんな風に我が子に接するのだろうか。困ったときには、頼れる人がいる、そんな環境で子育てができるだろうか。「母親」になれるだろうか。とても楽しみだが少し不安だ。

平成29年度 校内読書感想文コンクール 講評

○平成29年度選考委員

一年選考担当 板倉 大貴・外村 彰

四・五年及び専攻科選考担当

二年選考担当 上芝 令子

笠井 聖二 (委員長)

三年選考担当 木原 滋哉

山田 祐士

読書感想文 総評

自然科学系分野 笠井 聖二

本年度も校内読書感想文コンクールを無事に実施することができました。応募してくれた学生諸君及び実施にご協力頂いた関係の皆さんに感謝いたします。

偶然にも各学年の最優秀賞受賞は、環境都市工学科の学生でしたが、各学科とも読書感想文としてよい作品が増えてきたように思います。関係する先生方のご指導と学生の真摯な取り組みの結果だと感じています。一方、4年生以上の応募が0件に戻ってしまいました。4年生以上の学生に、そのように「校内読書感想文コンクール」に参加してもらえるか、今後検討していきたいと思っています。

一年読書感想文 講評

人文社会系分野 板倉 大貴

文章を読むという行為は毎日といっていいほどあたりまえに行われています。読書感想文はそのようななにげない読書行為を意識化し、読書という行為を日常の自動化された行為のなかから浮きあがらせる機会だと思えます。そのような機会としての読書感想文に本年も多くの生徒が意欲的にとりこんでくれました。提出された読書感想文は力作そろいで、なかなか優劣をつけるのがむずかしかったというのが私の本音です。

本年の課題図書は歴代の直木賞芥川賞受賞作のなかから各生徒が自身の興味ある作品を選ぶというかたちになりました。又吉直樹「火花」や池井戸潤「下町ロケット」など話題をよんだ作品がたくさん生徒によってえらばれていました。

多くの読書感想文のなかから優秀作を選びだすにさいして、私が重要視したのは感想文といえどもしっかりと工夫した表現で書かれているかということ。そして、ただ「共感する」「感動する」というだけでなく（もちろん作品を読んで共感する感動するというのはきわめて大事です）、選んだ作品を自分なりに切り、はたからみるだけではうかがい知ることのできない断面をこちらにみせてくれているかということです。このような基準からえらばれた六つの読書感想文はそれぞれの課題図書の秘めた魅力をたしかにつたえてくれているでしょう。

くりかえしになりますが読むという行為は呼吸をするようにあたりまえに行われています。多くのことばは魚をとりかこむ水のように透明にただながれさっていきます。意識的な読書行為によってそのようにながれさることばに手をのばしてみてください。きっとそこにはなんらかの感触があるはずですよ。自身をとりまく透明のなかに感触を発見すること。このような読書行為をこれからもぜひすすんで行ってってください。

二年読書感想文 講評

人文社会系分野 上芝 令子

二年生は昨年同様、課題図書を設定して、その中から本を選び感想文を書くという形で実施しました。今年の課題図書23作品（毎年若干変えています）に加え3作品、全国読書感想文コンクール（高校生の部）課題図書も加えたことも昨年同様です。今年は福島のフラダンス部を題材とした『フラダン』も多く読まれていました。例年と比べ、読まれた作品にあまり偏りがなく、割合満遍なくどの作品も読まれたようです。名作と呼ばれる作品も食わず嫌いすることなく手に取り、味わってもらえたようでした。力作も多く、「感想文」というより「レポート」に近い考察なども見られ、優秀作選考には苦労しました。

読んでいて少し気になったのが語彙の貧困といったところでしょうか。さすがに、「ヤバい」だの「イタイ」だのといった今時の若者の話し言葉は登場しませんが、「すごいと思いました」「おもしろいと思いました」等の表現には、何が？ どうして？ どのように？ と聞きたくなるような、自分の感じたものを「語りきっていない」文章がいくつか見られました。語彙というものは自分の思いを表すための有効な手段です。自分の感じていることがどんなものか、赤ちゃんなら泣いて笑って示します。大人はコミュニケーションという手段で相手に伝達せねばなりません。「どうせわかってくれない」と諦め口を閉ざすのではなく、まずすべきことは自分の思いを表すべき言葉を見つけること。友人同士のおしゃべりなら「ウザい」という言葉ひとつでお互い共有するものがあるかのように振る舞うのも楽しいでしょう。ですが、必ず自分で自分の思いをありのままかつ明確に語らねばならない時は来ます。語彙を増やす簡単な近道はありませんが（日常の積み重ねですから）、読書は語彙を知らず知らずのうちに蓄えてくれるものではありません。自分の中に言葉が増えれば相手の思いも（多少は）理解しやすくなります。何を自分が思っているのかを表現するための努力は決して惜しまないでください。今年度優秀作に選ばれた感想文にはその努力の跡がみとめられた感想文が選ばれたと思います。

三年読書感想文 講評

人文社会系分野 木原 滋哉

3年生の読書感想文の対象は、評論やノンフィクションであり、事件や犯罪、社会問題が取り上げられている作品が多い。自分が生活している環境や時代が違ってよかったという感想が多い中で、自分と共通点を見出したうえで、他者と丁寧に対話を重ねていた感想文がありました。そうした感想文を入選作品として選出しました。



行事報告 平成29年度ブックハンティング

学生会 文化環境委員長

中井 康貴（電気情報工学科4年）

6月18日(日)にブックハンティングが行われました。

場所はジュンク堂書店(広島駅前店)に1～3年生、4～5年生・専攻科生の二班に分かれ、今年は多くの学生に参加してもらいました。

休日の開催となり学生たちには忙しい中参加していただきましたが、皆さん広い店内のたくさんの図書の中から真剣に選書してくれました。予算は1人1万円程度でしたが、書店には多くの本が並んでいて、本を選ぶのにとっても苦戦しました。



ブックハンティングで、学生の皆さんに選書して頂くことにより、ほかの利用者の皆さんにも図書館を身近に感じてもらえるのではないかと思います。

普段買えないような本を選んで買ってきたので学校の図書館に並べられるのを楽しみにしてください。

毎年ブックハンティングを実施しておりますので、興味のある方は来年参加してみてください。ぜひ皆さまの参加をお待ちしております！

なお、ブックハンティングに必要な経費は後援会から支援いただいています。

ありがとうございました。



ブックハンティング図書紹介

防災福祉のまちづくり

T. H.

自分が防災や都市計画という分野に興味を持ち、この学校に入学したので、私の学びたいテーマにぴったりだと思い、この本を選びました。

日本の美しい小学校

A. T.

私は建築学科の学生なので、小学生が日々生活する建築にどのような工夫や面白さがあるのかに興味がありました。集団で過ごすための建築は、普通の住宅とはまた違った良さがあるのではないのでしょうか。

0円ハウス

Y. M.

「鳥が巣を作るように、人間も家を建てることができる」というフレーズがおもしろいと思って選んだ。いろんな住居を写真集のような形で本にしているところがいいと思った。

2時間で折れない心を手に入れるアドラー心理学

K. N.

心理学に興味があり、個人的に所有していないものだったからです。心理学の中でアドラーは主に人間関係の向上や、人にやる気を出させることについて書いていて、そこに興味がありました。

いなくなれ、群青

J. K.

魔女によって捨てられた人が集まる、外界から隔離された島「階段島」。島の住民は何故いるのか知らない、島を出る唯一の手段が「失くしたものを見つけ出す」など、とにかく謎だらけなお話です。

ミステリー国の人々

Y. A.

この本はミステリー作家の有栖川有栖さんがホームズやルパン、金田一耕助などの名探偵や名脇役などをピックアップし、紹介するエッセイ集です。

ミステリー好きだけではなく、本をあまり読まない人でもミステリー小説を手に取りやすくさせるガイドブックの役割もあるので試しに読んでみてほしいです。

CRISIS

N. T.

CRISISは、テレビでも放送しており、そのテレビを観て、この小説はどんな話なのか気になって選びました。

終物語 上

A. Y.

著者の西尾維新さん独特の世界観が面白く、クセがあって読みにくいかもしれないが、内容が深いのでこの本を選びました。

武将列伝 戦国終末篇

Y. Y.

戦国時代末期の武将の戦略、逸話が紹介されています。関ヶ原で戦った武将や幸田家の武将について知りたい人におすすめです。

「超」入門 失敗の本質

S. A.

失敗を成功の元に変えるためのヒントを戦争という切り口から見ていく本です。自分自身、失敗したことにとらわれて、自暴自棄に陥った経験を持つので選びました。

災神

M. T.

本の帯の迫力にひかれ、読んでみたいと思ったから選びました。

村上さんのところ

S. K.

日本文学、世界文学を代表する、村上春樹さんが読者からのメッセージに回答したものを掲載するWebサイト「村上さんのところ」を書籍化したものです。非常におもしろい回答が数多くあります。是非読んでみてください。

退屈なことはPythonにやらせよう めんどくさいことはPCに丸投げしよう!

R. K.

PythonでAI開発すれば、より複雑な処理もPCに投げられるかも。興味がある人は、「Pythonによる機械学習」「ニューラルネットワーク自作入門」もあわせて読んでみよう。

ダイナー

N. I.

最悪なアルバイトから命からがら、逃げるように転がりこんだのは裏社会で生きる人のための定食屋。冷たいオーナーや一癖も二癖もある客たちと、一般人の主人公、カナコの物語です。決して穏やかなストーリーではなく、常に生と死の間をギリギリ進んでいます。刺激を求めている方はぜひ！読んでみてください。

**アーサーの甥ガウェインの成長記
誰もが知っているアーサー王伝説。**

R. K.

誰もが知っているアーサー王伝説。円卓の騎士の一人であるガウェインにスポットを当てた物語となっています。興味のある方は是非手に取ってみてください。

J I Sにもとづく機械設計製図便覧 第12版

N. N.

機械科必見。最新版です。設計を行う上で、かなり役立つアイテムで、設計に必要なことはだいたい載っています。また、ワイド版なので、文字が読みやすいです。様々な場においてとても役立つので実務と学習に役立ててください。

誰も知らない世界のことわざ

A. Y.

この本は、世界中のユニークなことわざを紹介している本です。私がこの本を選んだ理由は、表紙の絵が可愛かったからです。ことわざの絵だろうけど、そうとは思えない絵ばかりだったので興味が湧きました。

やさしい台湾語カタコト会話帳

S. N.

呉高専の研修旅行で台湾に行くので選んでみました。行くまえに、ほんの少しのかんたんな言葉を学んで行ってみるのはどうですか？

素敵な日本人

S. K.

東野圭吾さんの短編ミステリーです。約30ページほどで完結するにもかかわらず、内容もしっかりしているので、読みやすく、おもしろい作品です。

藤原先生、これからの働き方について教えてください。

M. Y.

高専での時は、あっという間に過ぎて、最終的には働く時がやってきます。私は高専に来ましたが、どんな仕事に就いてどんな働き方をすればいいのか分からなくて、ヒントになったらいいなと思ってこの本を選びました。

ストーリー・セラ

A. O.

私はもともと有川浩さんの作品が好きで、ストーリー・セラはまだ読んでいなかったのですが、選びました。また、本の帯にダヴィンチの恋愛小説部門1位とあり、それも気になり、読んでみたいと思いました。

Kuroko's BASKETBALL 1&2

M. S.

スポーツを通して深まっていく絆に感動する。一生懸命、才能のあるなしに関らず、みんなが努力していく姿は元気をもらえる。作者の絵が、話数を重ねるにつれてうまくなっていくのにも注目！！

マヨネーズがなければ生きられない、スペイン人シェフのマヨネーズの本

T. D.

ジャンルで言えば料理本。もっと言えば、マヨネーズの料理本です。スペイン人シェフ考案レシピ、凝った手順が面倒な方やマヨネーズなしでは生きられない方におすすめです。

金を掛けずに知恵を出すからくり改善事例集

K. T.

ベルトコンベアー上の商品同士がぶつからないようにする。そんな目的を達成する為に動力センサーを使わず、ちょっとした工夫で解決する。そんな先人の閃きが詰まっている一冊です！

台湾

M. Y.

昨年から修学旅行の行き先が台湾になりました！この本は修学旅行で行くであろうところがイラスト付きで紹介してあります！また台湾で使える簡単な言葉も載っているので、これを読んで安心して楽しんでみてくださいね！

円周率 1000000 桁表

A. F.

楽しい楽しい円周率がただただ羅列されているだけの本です。乱数を作る時や、時間を忘れて数字をずっとながめていたい人にオススメです。

不規則信号処理

S. J.

この本には、信号処理の基本となることが分かりやすく書かれている。また、デジタル信号処理において、プログラムを用いて設計しやすいよう行列ベクトルによる信号表現を用いて解説してある。

まるごとわかる！庭づくりDIYの基本

M. K.

私は庭に花壇と畑があるが、それらをもっと魅力的なものにするとともに、庭の余っているスペースに自らの手で新たに開拓して、土地の有効活用をしたいと考えているため、この本を選びました。

苦汁100%

Y. Y.

バンド「クリープハイプ」のギターボーカルである尾崎世界観が自らの日々を綴った日記集。ファンであってもそうでなくても楽しめるのではないでしょうか。

ショートショート・BAR

K. M.

BAR を舞台にしたショートショート集。軽めのカクテルの如くさくさく読めます。(※お酒は20歳になってから)

HTML5+JavaScriptによる画像・動画処理入門

H. H.

JavaScript はブラウザでも OS 上でも動かすことのできる汎用性の高い言語です。C に比べると自由度は低いですが HP 上で何かしたい画像処理をしたい、と言う人にオススメです。

ノーストリリア

I. O.

つまらなそうな表紙から繰り出される少年と少女のとても面白いボーイミーツガール！寿命が無くなった世界で地球を買い取った少年が人類の未来を変える！？ファンタジーチックな SF を楽しんでください。

クリエイティブ業界に就職するためのポートフォリオの実例集

R. T.

建築学生は発表や就活でポートフォリオを作成することが多いので参考になると思い選んだ。建築に関するポートフォリオ以外にも違うジャンルのポートフォリオも載っていておもしろいと思った。

グローバル時代の必須教養「都市」の世界史

Y. I.

この本は世界 10 都市の歴史を紐解くことで、世界史を理解するという本です。著者はライフネット生命を立ち上げた出口治明氏です。グローバル化が進むこの時代に世界を理解するのにぴったりな一冊です。

プロレス語辞典

R. O.

私がこの本を選んだ理由は、プロレスの動画を見て分からない言葉多く出てきたからです。そのたびにネットで検索していたのですが、手軽に引ける辞書のようなものが欲しいと思いこの本を選びました。プロレスは戦後から続く立派な文化ですので、用語を知ることにより深く楽しんでいきたいです。

ようこそドボク学科へ！

M. T.

本の帯の”土木と名乗ってないけどドボクを学ぶ、すべての学生へ！”という言葉に自分があてはまっていたので興味を持ちました。

【表紙】街を望んで

両城から、呉の町の一風景を撮影しました。急な階段と、そんな街の中での日常を切り取りました。

(撮影：呉高専建築学科 3年 荒谷 太一)

学生と築いていく図書館

～ 今年度も多くの学生が図書館に携わってくれました！ ～



—インキュベーションワーク—

◀ 知的書評合戦ビブリオバトル
毎週一回、本好きが集まって、
オススメ本を紹介しあっています。



工房づくり ▶

図書館のニーズにあわせた、
木の温かみのあふれるオリジ
ナルの家具を作ってくれました。



—クラブ・同好会活動—

◀ 文芸部
学生の皆さんに、オススメの
本を紹介してくれています。

写真同好会 ▶

呉の風景写真等で落ち着いた
雰囲気のある空間を
作ってくれています。



貸出回数上位ベスト 10

(調査対象期間：平成29年4月1日～平成30年2月28日)

順位	題名	著者	回数
1	蜜蜂と遠雷	恩田 陸	15
2	君の膵臓をたべたい	住野 よる	13
3	また、同じ夢を見ていた	住野 よる	11
4	TOEIC L&R test出る単特急金のフレーズ	TEX加藤	10
4	第1部:騎士団長殺し	村上 春樹	10
4	か「く」「し」「ご」「と」	住野 よる	10
7	はじめて受けるTOEIC L&Rテスト パーフェクト攻略	松野 守峰 根岸 進	9
7	はじめての Android アプリ開発	山田 祥寛	9
7	みんなが欲しかった!宅建士の教科書(2017年 度版)	滝澤 ななみ	9
7	孤狼の血	柚月 裕子	9

編集後記

季節の推移や天気によって、図書館の窓からの光の加減が違ったり、図書館をでたときの空の色が違ったりします。

読書や勉強、調べものを終えて図書館をあとにしたときに、充実感が生まれるような空間づくり、時間づくりを目指したいと思っています。